

# 奉行と人相学

菊池寛

青空文庫



おおおかせんのかみ  
大岡越前守

は、江戸町奉行になつてから一、二年経つた

頃、人相と云うことに興味を持ち始めた。

それは、月番のときは、大抵毎日のように、咎人の顔を見て

いるために、自然その人間の容貌ようぼうとその人間の性格とを、比較

して考えるようになったのである。

が、大抵の場合、人殺しや、強盗は凶悪な面構えをしているし、かたじけなくは、ずるそうな顔をしている。

が、折々愚直そのものと思われるような男がずぶとい悪人であったり、虫も殺さないように見える美人が、亭主を毒殺などしている。そうして見ると、愚直そのものと思われる顔にも、どこか

に根づとい狡こうかつせい狷性せいがひそんでいなければならぬし、虫も殺さないような美しさの中にも、人に面おもてを背けさせるような残忍性が、ひそんでいなければならぬ筈はずである。

そう云うものを見つけるには、人相学と云つたようなものを、研究しなければならぬのではないかと考えていた。

丁度その頃、彼は旗本の土である山中やまなか左膳さぜんと知合になつた。

左膳は当時の大儒むろきゆう室鳩巢むろきゆうそうの門下で、代講までするほどの高弟であつたが、中途から易学に凝り出し、易、人相、手相などを研究していた。看板こそかけていないが、内々では易や手相、人相などの依頼に応じているとの噂うわさである。むろん、千五百石と云う相当な知行取だから、商売のためでなく道楽なのである。

ある酒席で、同座したとき、はしなくも人相の話が出たので、越前が人相に興味があることを話すと、左膳は、

「では少し御伝授いたそう。拙者、お邸やしきに出向いてもよい」と、云った。

が、同格の旗本から物を教わるのに、こちらから出向かない法はないので、越前が辞退すると、

「いや、遠慮めさるな。拙者、これが道楽で、貴殿のような御仁が、人相をやって下さるとなれば、拙者手弁当で出かける」

と、たいへんな、ハリキリ方である。それで、越前も仕方なく、「拙者、今月は月番でござるから、来月になりましたら改めてお願いに参る」

と、その場は話を打ち切った。越前は、そのままにするつもりでいたところ、月が更かわると、左膳の方から、いきなり押しかけて来た。

来られて見ると、越前も否応なく左膳の講義をきかないわけには行かなかつた。

聴いて見ると、なかなか興味があるので、越前も耳をかたむけた。

「お忙しい貴殿だから、肝心な要点だけをお伝えしよう」

と云う前置きで、左膳の教え方は、なかなか実的であつた。

召使いの男女などを連れて来させて、臨床ポリックリ的な講義だつた。

左膳は、三日にあげずやって来た。越前が、拙者の方からお邸

へお伺いすると云つてもきかなかつた。

「いや、貴殿が日々のおさばきに、人相を利用して下さると云うことは、われわれ人相学者にとつては、大慶至極な事じゃ。これで、人相学も世に行われ、貴殿の名奉行ぶりも一段と冴<sup>さ</sup>えて来る。拙者としても、こんな教え甲斐のある相手はない」

と、左膳は、同じことをいく度もくり返して云つた。

左膳も、相手の熱心さにつられて、ついつい深入りをした。翌月は、南の月番であつたが、左膳は、

「夜中でもお伺いしてもよろしい」

と、云い出したので、越前の方から、

「三と七の日は休みでござればその日……」

と云わずに居られなかった。

こうして、二月半ばかり、左膳の教授を受けたが、もう左膳の方には教えることがなくなった。

「御存じだと思いが、仏教の方で瀉瓶しゃへいと云う言葉がある。瓶かめの水を瀉うし更かえるように、すっかり伝えてしまうことである。貴殿に見ても、実際その人間の性根や行状を調べることが出来ないから、自分の鑑定の当否を知ることが出来ない。ところが、貴殿はそれが出る。貴殿に、そのお志があれば、天下第一の人相見になれるだろう」

と、左膳は云った。越前は、その善意なおだてを苦笑しながら



聞いていた。

が、越前は、そうめい聡明な人間であつただけに、いたくらしげむね板倉重宗が原被両告の訴えを聴くときに、その人物風体から、先入観を与えられることを怖れて、障子を隔てて聴いたように、越前も人相に依つて犯人に対する先入観を形づくることを怖れていた。裁判は、あくまで自分の良識に依ることにし、人相はあくまで、参考に止めて置こうと考えていた。が、幸いな事に、良識と人相とは、ある程度一致していた。虫も殺さないような美人の顔の中にも、一点その残忍性をあらわす特徴などを、見つけるようになっていた。

越前の場合には、毎日の裁判で見る多くの犯人を、実例として人

相学の研究を積むのであるから、一年も経った頃には、その道で自得するところが多く、よほどの自信を持つようになって居た。

その頃、彼は初めて白洲しらすに引きすえられていた盗賊の木鼠きねずみちよ

長吉うさちを見たのである。彼は、仲間ちゆうげんで木鼠ともむささびとも

あだなあだな 仇名をとっていた。むささびが、梢こすえから梢へ身を移す如く進退が

敏捷びんしょうであつたからである。

調書で見ると白状している罪科は、十数件に余っている。窃盜が、十件あまりと、スリが五、六件である。が、一件の金額が十両以上のものはなかった。その頃の成文法及び慣習法に依ると、その人間の盗んだ金額が、総額がいくらに上ろうと、一件の金額が、十両に上らない場合は、死罪を免れることになっている。十

両と云えば、戦争前の金額にすれば、千円近いのである。現在の金にすれば、十万円にも上るだろう。江戸の初には、一両で米が四石であった。十両で、四十石である。大岡越前時代でも、二十石位である。忠臣蔵の連中の中で、半分以上は七両五人扶持と云った人々である。七両十両などと云うのは、相当な武士の年俸である。ある足輕が、五両の金に困って死ぬとき、

死んだらばたつた五両と云ふならむ

生きてゐたらば二分もかすまい

と云う辞世の歌を作っている。もつとも、二分と云つても、そ

の頃吉原よしわらの一流のおいらんの揚代が二分であつた。だから、おいそれとは、誰もかしてくれないわけである。

だから、十両と云うのは、大金である。むかしの苛酷な刑法が十両以上盗んだものは、斬ざんに処したわけである。尤もつとも、戦国時代には、一錢斬ぎりと云つて、永樂錢一錢を盗むと斬つてしまったのである。しかし、むかしの刑法はまたのんきな所があり、なしくずしに盗めば、百両盗んでも命は無事であつたのである。

与力同心が調べて罪科が定まつた者は、奉行が判決を下すことになつていた。越前が、長吉の調書を見たとき、「此者は本所ほんじよみどりちよう

緑町みどりちように住まっているが、町民の間では義賊と云う噂がある。

同人から、金銭を恵まれたる貧民は、数限りもないほどである」

と云う備考書がついていた。

本来ならば、佐渡送りの罪科であるが、その備考書に、心を動かされた彼は、三年位の島送りにしてやろうと思っていた。

が、直接白洲で本人の顔を見た時、越前の心は更に動いたのである。色白のやさ男で、呉服屋の手代のような顔をしている。手代と云って、手代の中でも武家屋敷へでも、出入りする位の品格を持っていた。が、その事よりも長吉の人相が、越前が頭の中に思い浮べた隠徳の相の一つに、あまりにもピッタリしているのである。

「顔色ハ白黒ヲ問ハズ眼中涼シクシテ、憂色ヲフクミ左頬ニエ

クボアリ、アゴヤヤ長シ」

隱徳の相として挙げられているのは、三項ある。これが、その一項で、長吉はそれに、寸分の隙もなく、あてはま<sup>す</sup>まっているのだ。なるほど、これなら近所の貧民に恵んでいる筈だと思った。平素は、こうした軽罪のものに、ただ判決文をよみきかせるだけであるが、長吉の場合、越前は相手と話して見たくなつたし、出来ることなら教化して、その当時の言葉で云えば、真人間にしてやりたいと思つた。

「長吉とやら、何歳になるか」

と、越前が話しかけたので、列座している与力達は、びっくり

していた。奉行は、直接に犯人に話しかけるなど、稀有けうであるからである。

「へい、二十五でございます」

言葉つきも尋常である。

「両親はないか」

「ございません」

「いつ別れた？」

「父は十一歳の時存生して居りました。母は覚えて居りません」

「近隣の貧しい者達に、時々金銭を合力していたのか」

「へい。おはずかしうございます。時折、煙草たばこ銭せんぐらいは……」

「うん、何人ぐらいに……」

「覚えて居りません、ホンの四、五人でございます」

こう云う善事を訊きいてやると、大抵犯人は得意になって誇張するものである。が、彼はアツサリしたものである。

「二分とか一分とか、まとまったものを与えたことはないか」

「あるようでも、ござりまするが、忘れました」

「いや、盗みとつた金を貰もらったからと云つて、別に貰った人達は、罪にならない。ありていに、云つたらどうだ」

越前は、長吉が金をやった相手に迷惑がかかるのを怖れてかくしているのだと思つて、そう云つた。

長吉は、苦笑して、

「怖れ入ります。仕事のみいりがよかつたときとか、ばくちで当



りましたとき、つい身祝いの気持で、少しはバラまいたことがございませぬ」

「それはどう云う気持でか？」

長吉は、しばらく考えていたが、

「わたくしめは、変な性分で、裕福そうなお人を見ると、つい盗んでやりたくなります。貧乏なお人を見ると、ついくれてやりたくなります。もって生れた性分で、理屈もわけもございませぬ。のどがかわくと水がのみたくなるのと、同じでございませぬ」

越前は、苦笑しながら、

「しかし、長吉、その方が今まで盗みとつた金は、幸いはずれも十両をこえていないからよいが、もし盗みとつた財布に十両はい

つて居れば、その命の呼いはなかつたぞ。それも、覚悟の前か」

長吉は、しばらく考えていたが、

「どうも仕方がございません」

と、平伏した。

「向後、盗みを止めようとは思わないか」

「思つて居ります。今までも、時々思いましたが、それがどうも

……」

と、云いかけているとき、長吉の吟味さつきに当つていた佐々と云う

与力が、

「こら、長吉、御奉行さまの直々の御調べだぞ。改心すると、ハ

ツキリとお請けいたせ」

と、云った。この男は、備考書をつけた男で、長吉に同情していたため、長吉のありのままの返事を、とがめたのである。

「へいへい改心いたします。ふつつりと改心いたします」

と、長吉は、平伏した。

越前は、むしろ長吉の自然児らしい返事の方が気に入っていたが、しかし形の上では、こうハッキリ答えてくれないと、罰をかくするわけには行かなかった。

「では、長吉、この度は、上かみの特別な慈悲に依って、たたきと云うことにしてつかわす。その代りに、向後をつつしめよ。重ねて、罪を犯すと、重科はまぬかれぬぞ」

と、越前はやさしく云ってきかせた。

やがて、与力に依つて、判決文が、よみ上げられた。

答刑ちけいなどは、当時は、現代の執行猶予くらいの恩典だった。

が、隠徳の相と盗心の相とは、両立するものと見え、木鼠長吉は、改心しなかった。すぐまた盗賊稼業を始めたと見え、やがて再び捕えられた。北町奉行の手に捕えられたのだが、一度南町奉行に捕えられた事のあるものは、調書や何かの関係で、北町奉行から、南町奉行所へ廻して来るしきたりである。

同心から渡された、新しい罪状書を見た大岡越前は、眉まゆをひそめた。改心どころか、犯行は一倍ましになっている。

金額も、十両以上が三件もある。しかも、その内一件は、旗本

屋敷へ忍び込んで、三十両はいつている主人の手文庫を盗んでい  
る。大名屋敷や旗本屋敷に忍び込んだものは、武家の権威を維持  
するためにも、重科に処せられるのである。こうなると、一度軽  
く処罰した責任もあるので、極刑に処する外はなかった。

昔も、人命はある程度重んじたので、死罪の者は、奉行から老  
中に申請して將軍の裁可を受けることになっていた。

尤も、それは形式的なもので、奉行が決定した罪の判決文の上  
に、將軍が朱筆で、マルをかくだけである。むかしは、將軍自身  
が死一等を減ずることなどがあつたが、越前が就任してからは、  
そんな事は一度もなかった。

長吉の名は、他の七人の死刑囚と共に書き出されて、將軍の裁

可を受けるために、幕府にさし出された。いつもの通り、十日ばかり経つと、返つて来た。ホンの形式のために、越前はそれを聞いて見た。すると、思いがけもしないことを、その書類の上に見出した。

長吉の判決文だけには、將軍の朱筆の跡がないのである。これは、あきらかに將軍が、朱でマルをかくのを、忘れたのである。書いたつもりで、次をめぐってしまったのである。將軍の不注意であることに、相違なかつた。

老中が見たと云うしるしはついて居るが、將軍の朱筆はないのである。幕府に伺つたが、將軍が死罪を裁下しなかつたと云う形式がととのつている。

越前は、同心ともう一度差し出すべきかどうかを相談した。しかし、もう一度差し出す事は、將軍の不注意を、とがめ立てするようにも当るのである。形式は、ととのつているのだから、死一等を減じて判決した方が、合法的なのである。

越前は、長吉の相にめでて、もう一度長吉をゆるしてやることを決心した。そして、意地にも改心させて見ようと思った。

越前は、同心達に云った。

「われわれ人間のさばきには、どうしても間違いがあつた。長吉の名前に、朱筆がないのは、將軍家の御失念かも知れないが、やはり人間のあやまちを正す天意かも知れないと思う。わしは、もう一度長吉をゆるして見ようと思う」

同心達も、越前のふかい考え方に賛成した。

間もなく、判決の日が来た。

越前の前に、引き出された長吉は、面目なげに、うつむいたままである。

越前は、いつもの通り、しずかに云った。

「長吉面をあげい……」

「へえ、へえ、申しわけございません」

と、一度あげた面をまた地に伏せてしまった。

「死罪は、覚悟しているだろうな」

と、越前が云うと、

「御奉行さまのお言葉にそむきました上は、はりつけでも獄門で



もどうぞ、御存分に……」

長吉は、面をあげながら云った。

「そんなに盗みがしたいのか……」

「半月ばかりも辛抱しましたが、どうもダメでございました。へえ、へえ」

「うむ」

越前は、じつと長吉の顔を見ていたが、彼の顔の隠徳の相は、いよいよハッキリと浮び上っているのである。

「ところが、長吉、もう一度お上の慈悲を受けることになったぞ……」

と、云ったが、長吉は手をふるかわりに、縛られている身体を

左右にふりながら、

「お奉行そりやいけません。二度でも、三度でも同じことです。生かして置いて下さると、またやります。同じでございます。どうぞ、スツパリとやって下さいませ。その方が、私も氣持がよろしゅうございます」

空威張や、てらいで云っているのではなく、心からそう云っているのだった。

「いや、そうはいかぬ。下郎のそちに、仔細しさいは云えぬが、そちの命が助かるようになっていなのだ。長吉、そちはよほど、人に善根を施しているのだな」

「善根とは……」

「人に情をかけたことじゃ。そちは、よほど人を助けていると見えるぞ。ありていに、云つて見たらどうだ」

「こんなケチな野郎に、たいした事は、出来ません。ホンの煙草錢ぐらいは……」

「いや、そうじゃあるまい。お前の恩を、泣いて喜んでいる者が、いく人か居るに違いない。思い出して見い」

「いやア……」と、云いかけたが、さすがにそのままだまつて考へていた。

「思い出すだろう、かくささず云つて見い」

と越前は催促した。

「そうでございますなア。こんなに、よろこんでくれるのなら、

これからもまた、人に金をやろうと思つたことが、一度ござい  
す。二年ばかり前でございましょうか、十一月も末のある晩、四  
つ頃（十時）でございましたらう、永代橋えいたいばしの上を通りかかりま  
すと夜泣きそばが、屋台をおろしていましたので、立ち寄つて一  
杯ひっかけましたが、そのそば屋と云うのが、十三、四の小僧で  
ございます。うすぎたないあわせ袷を着てガタガタふるえているのでご  
ざいます。しかも、真青なひだるそうな顔をしているのでござい  
ます。『お前ひもじいのじゃないか』と、きいてやりますと、三  
日食つていないのだと云います。『じゃ、おじさんが代を払つて  
やるから、そばを喰いねえ』と、申しますと、商売物のそばを喰  
べると、冥利みょうりがつきると申します。いろいろ事情をきいてやり

ますと、一人の母が病気で二年ごし寝ているが、一昨夜も昨夜も、雨で商売が出来なかつたので、何も喰べさせる事が出来なかつた、お客さまが、代を払って下さるのなら、家へ持って帰って、おふくろに喰べさせたいと申します。可哀そうに存じましたので、そば代を払った上に、丁度その賭場とばでかせいだ中から二分金を一つやりましたが、感心なことにそれを、なかなか受け取ろうとは致さないのをごいいますが、やっと地に投げすてるようにして参りましたが、それでも私を十間すわばかり追いかけて来ましたが、及ばないと見え、そのまま地面すわに坐つて私の方を拜んで居りました。やくざな私を、拜んでくれるのかと思うと、私もわるい気持はいたしませんでした。それ以来、半年ばかり永代の近くを通ります

ときは少し遠回りを致しましても、立ち寄ってそばを喰うことに致して居りました……」

越前も、ひとみを少しうるませながら、

「その都度合力もいたしたか……」

「ところが、御奉行さま、なかなかしつかりした小僧で、わけのない金はなかなか取ろうと致しませんので、手こずりました。そのうち、母親が死んだとかで、きょうばし京橋の方の店に奉公したようでございます」

「左様か。長吉、まだその外にあるだろう、そちは人命を助けたことがないか……」

と越前は、やや前かがみになって訊いた。

長吉は、しばらく考えていたが、

「……そうおつしやるとございました。古いことでつい忘れて居りました。もう五年前、私が盗みを始めた頃でございました。両りょう国こく橋ばしの上で、身投げをしようとする老人を助けました」

「うむ」

「何でも、村の貧しいお百姓達が、御年貢を収めないで、庄屋殿がじゅろう入牢じゅろうしている。それを救い出すために、村中が五十両と云う大金をあつ蒐めて、村中で一番物がたいその老人に、あずけて江戸へよこした。所が、その金を盗まれたので、申訳ないと云うための身投げでございました」

「そちが、その金を才覚してやったのか」

「五日と云う期限を切つて、その間に盗み集めてやりました。御奉行さまの前ですがあのときほど、盗みが面白かつたことはございません」

越前は、苦笑していたが、

「長吉よく物を考えて見よ、その老人が生命いのちを失おうとしたのは、その老人の金を盗んだ盗人の故ではないか。そちも、人の金を盗むことで、その人の生命を奪っていることもあるのだぞ。盗みと云うことが、悪事であると云うことがそれで分らないか」  
と、云った。

長吉は、また地面に伏しながら、

「御尤もでございます。が、御奉行さまのお言葉を返すようで」



ございますが、私は金持のお武家や町人ばかりを狙っていますので、その金で向う様が、首を吊るとか身を投げるとか……」

と、云いかけるのを越前はさえぎって、

「よし分った。そちを、再度ゆるしてやるについては、江戸お構いにしよう。そちは江戸にすることがいけない。わしの知行所である越前へ送ろう。が、庄屋へ添状をつけてやるから、百姓をいたすがよかろう。わしの知行所の村は、わしが貧乏人の出来ないように、数年来心を用いたから、お前が恵んでやりたいような貧乏人もいない、またそちが金を取りたくなるような金持もいない筈だ。その上、ここ十数年来盗難など一度もない、もし今度あったら、直ぐそちがやったと云うことになる。どうだ、長吉、そこ

へ行つて見るか」

「怖れ入りました。ありがとうございます」

と、長吉は、容易に頭を上げなかつた。越前は、木鼠長吉を再び笞刑に処した。もし、老中などから異議があつても、堂々と申し開くだけの自信があつた。

ただ、あまりに人相の鑑定がピッタリ当つたうれしさに、相手をあまやかしているのではないかと云う、自分自身の反省には、しばらくの間悩まされたのである。





# 青空文庫情報

底本：「捕物時代小説選集6 大岡越前守 他」編「春陽文庫、春陽堂書店

2000（平成12）年10月20日第1刷発行

底本の親本：「新今昔物語」芝書店

1948（昭和23）年

入力：岡山勝美

校正：noriko saito

2009年9月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 奉行と人相学

菊池寛

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>